

ソーシャルワークにおける「弱者」の視点

——ケースワーク（臨床ソーシャルワーク）を中心に——

安井理夫

1. はじめに

久保は、『自立のための援助論』のなかで、竹内てるよの「強者には強者の生き方があるように、弱者には弱者の生き方がある」⁽¹⁾ということばを紹介している。そして「健康な状態になることだけが、入院の意味、ひいては生きる意味ではない。そのままの状態でもいい。『弱者』を生活している者にしかわからないもう一つの世界がある。そう考えると、この一文に力強ささえ感じられたのだった」⁽²⁾とつづけている。

ソーシャルワークは、もともと、このような弱者の生き方に関心を寄せてきたはずであった。しかし、医学モデルからライフ・モデルへの移行にともなって、弱さではなく「強さ」をサポートすることに関心の中心が移り、エンパワーメント・アプローチにおいては、強さ（strength）のあらわれとしての power⁽³⁾を志向することがソーシャルワークの中心的な課題とされるようになってきた。

エンパワーメント・アプローチの発祥の地であるアメリカの最近の動向、たとえば、2001年の秋からはじめられたテロリズムに対する戦争行為において、西側諸国に“Show the flag”というような粗暴な強要を行ったり、二酸化炭素削減京都会議の議定書に背を向け、一国だけ独自の案を主張するというような独善的な振舞いなどをみていると、筆者は、パワー

をひたすら追求することの危うさを感じずにはいられない。

一方、日本においては、たしかに、社会福祉の基礎構造改革の理念として社会的公正とならんで自己実現がとりあげられてはいる。しかし、そこで述べられているのは、サービスの評価や権利擁護のシステムを構築し、ケア・マネジメントや自己選択の機会を保障するといった外的な条件整備が中心であり、これらさえ整備されれば、自己実現は予定調和的に達成されると考えられている節さえ見受けられる。筆者は、生き方や価値観の多様性または重層性こそが社会福祉の視点から自己実現を考える場合のキーワードだと考えているが、そこにみられるのは保健や医療の（あるいは健康という）視点からのみ紡ぎ出されたかのような管理的・画一的な自己実現のとらえかたにみえる。

これら2つに共通しているのは一面的であるということであり、本来は個別的な側面を含んでいるはずの善や幸福といった価値が、パワーによるコントロールやマネジメントにすりかえられていくところにあると思われる。この文脈では、共生という概念さえ、交響的に人間の社会や生活、生き方をとらえようとする視点とはなりえない。それは、単にある社会において弱者が強者と同等の発言力をもつという意味にすぎない。

また、このことは、水島がつぎのように述べることも符合している。「独創的な仕事をしたばかりに上司からにらまれ、首になってしまった人たちの悲劇にも私は接してきた。真の自己を見い出せば楽しく生きられるなどというナマやさしいものではない」⁽⁴⁾。しかし、自己実現のこういうきびしさやパラドキシカルな側面にふれた言説を社会福祉の分野でみかけることは、ほとんどないのではないだろうか。

したがって、こういう時代にこそ、ソーシャルワークにおける弱者への関心について、いま一度、考えてみる必要があるのではないかと思われる。これが、筆者が本稿を執筆しようとした動機である。

構成としては、まず、ケースワークにおいて、弱さがどのようにとらえられてきたのかを概観し、弱さから強さへと関心が移っていくことになっ

た契機について検討する。そして、自己実現や生きがいといったソーシャルワークの目標において弱さがどのような意義をもつのかについて、効力感とのかかわりにおいて考察していくことにしたい。それは、ソーシャルワークにおける弱者の視点を再確認する試みになるはずである。

2. ケースワークにおける「弱さ」への取り組み

この章では、まず、ケースワークにおいて、「弱さ」がどのように認識されてきたのかを、その歴史からレビューしてみたい。

ケースワークの前身であるとされる友愛訪問が行われた19世紀後半から20世紀の初期にかけては、貧困の原因は、ひとびとの道徳的欠陥にあるとされていた。つまり、ここでの「弱さ」とは、道徳的欠陥のことであり、人格的感化による矯正がめざされた。

1917年にケースワークを専門職として提唱したリッチモンドは、社会環境を重視し、適切な環境によってクライアントの「パースナリティ」⁽⁵⁾は健全に発達していくという視点から、その理論を構築した。

リッチモンドを引き継いだ診断派のケースワーク理論は、フロイトの精神分析理論をもとにして展開された。したがって、診断派のケースワークにおける「弱さ」とは、自我機能の弱さのことであり、未成熟な人格を意味している。ここでは、社会的対人関係における援助技術としてのケースワーク⁽⁶⁾が存在していたといえる。

1960年代になると、アメリカで公民権運動や福祉権運動が起こり、ソーシャルワーク、とくにケースワークは、批判にさらされた。これらの運動によってクライアントの力をまのあたりにし、従来のケースワークの無力さを実感した結果、ライフ・モデルと総称されるアプローチによって、クライアントの弱さではなく、クライアントの能力を信頼し、強さをサポートしていく方向に、援助方針が転換された。

エンパワーメント・アプローチは、文字通り、クライアントのパワーに

表1 それぞれのアプローチの関心とその援助方法

	弱 さ	強 さ	方 法
友愛訪問	道徳的欠陥		人格的感化
リッチモンド	不適切な環境による人格の未発達		専門的調整
心理社会的アプローチ (診断派ケースワーク)	自我機能の未熟さ (反復強迫)	自我の適応力	反省的考察 (理性的)
機能主義アプローチ (機能派ケースワーク)		潜在能力	関係療法
問題解決アプローチ		ワーカビリティ (能力・動機づけ・機会)	折衷的
ライフ・モデル (生態学的アプローチ)		適応能力(対処能力) 滋養的環境	折衷的 短期モデルを含む
エンパワーメント・ アプローチ		効力感 (動機づけ、アクセス)	

着目し、それを強化していくアプローチである。ここでのパワーとは効力感のことをさしている。

これをまとめてみたのが、表1である。

表1をみて気づくことは、ソーシャルワークが、弱さから強さへと関心を向け変えていく契機となったのが、①機能主義アプローチからの批判と、②問題解決アプローチからライフ・モデルへとつづくケースワークの再編である点である。次章では、この2つについて、くわしくみていくことにしたい。

3. 2つの批判と「弱さ」

(1) 機能主義アプローチからの批判

精神分析では、いまの不適応を、過去の心的外傷に影響を受けた行動様式の反復強迫としてとらえる。したがって、診断派のケースワークにおけ

る援助の目標も、自我機能の未熟さ（すなわち弱さ）を克服していくことにあるといえる。

たしかに、診断派の援助者は、転移を通して、「いま、ここ」で、それらにかかわる⁽⁷⁾のだが、そのおもな関心が未熟さにむけられているため、その原因は、どうしても過去にもとめられることになる。この点で、診断派の視点は、クライアントの可能性にはむけられていないといつてよい。一方、機能主義のケースワークは、いま、ここに着目し、意味の生成にかかわる（つまり、いまから未来へというベクトルをもった）実存主義的なアプローチである。

しかし、強さが、弱さへのアクセスによってもたらされることもあるということを考慮すれば、機能派からの批判は短絡的すぎるともいえる。機能派がいう可能性とは、ロジャーズのことばでいえば、自己概念が有機体レベルでの体験と一致していないことによって、いままで気づくことができなかつた実感にめざめ、気づいていくことである。これは、現象だけをとらえれば、不適切な防衛機制によって歪められていた体験を修正していくという反省的考察の過程と、決定的といえるほどのちがいはないと思われるからである。

(2) ライフ・モデルからの批判

ライフ・モデルからの批判のいちばんのものは、心理社会的アプローチが、①人格の成熟をめざすために、時間がかかりすぎ、いますぐ援助を求めているクライアントの役に立たない、ということと、②1960年代の当事者運動と比較しても、社会的な重圧に喘ぐクライアントの役には立たないこと、の2点であった。①の批判に対してケースワークは、方法を問題に焦点化させた短期処遇モデルを発達させた。これらの特徴は、クライアントの成熟を待つのではなく、いまある能力を活用するという援助観の変換である。②の批判に対しては、クライアントを無力なひととしてとらえるのではなく、問題解決の能力をもつひととして理解していくというクラ

イベント観の変換や、「社会的弁護」や「リーチ・アウト」などに代表される役割や機能の拡大をはかって対応した⁽⁸⁾。そして、その理論的な根拠として、生態学的視座がとりあげられることになった。つまり、この生態学的なパースペクティブまたは、それとシステム思考とが統合されたエコシステムという発想こそ、ソーシャルワークの固有の視点⁽⁹⁾だということである。

ただ、ここで検討しなければならないのは、生活モデルと対比させるかたちで述べられるようになった医学モデルを、心理社会的アプローチとまったくおなじものとして考えていかどうかということである。医学モデルは、ワーカーが処遇の主導権を握るというワーカーの強さ（power）にもとづく援助観である。しかし、フロイトの時代でもクライアントとの治療同盟は重視されていたし、ホリスの理論も、自我心理学の知見を取り入れ、自我の適応能力にも関心が向けられているため⁽¹⁰⁾、クライアントの弱さのみにコミットしているというのは、図式的に過ぎると思われる。とすれば、ホリスのいう「状況のなかの人間のゲシュタルト」⁽¹¹⁾と、ライフ・モデルの「個人と環境との交互作用」⁽¹²⁾とのあいだには、まったく異質のものといえるほどの大きな隔たりはないということになる⁽¹³⁾。もちろん、ホリスは、処遇を直接的処遇と間接的処遇とに分類し、その2つのものを理論的に統合する視点が弱いということではできる。しかし、ここでの「弱さ」から「強さ」へという文脈だけにしぼって述べるなら、心理社会的アプローチが自我機能に着目した時点で、クライアントの「強さ」にコミットしていく視点が、ケースワークに取り入れられたというべきである。つまり、医学モデルとは、ワーカーが処遇の主導権を握るという構造（援助者の強さ）と、過去の反復強迫にもとづく一種の運命決定論（クライアントの弱さ）のことをさすきわめて理念的なモデルであり、心理社会的アプローチや生活モデルとは、同一直線上で論じることのできないものであることを指摘できるとと思われる。

つまり、医学モデルの問題点として指摘された「弱さ」への関心は、か

なり初期の診断派のケースワーク理論に限定して理解するのが妥当だと思われる。

4. 効力感についての検討

心理社会的アプローチが自我機能の適応能力に着目するところからめばえたクライアントの強さへの関心は、ライフ・モデルによって、生態学的な視座によって個人と環境とをトータルにとらえる視点へと発展し、「人間は環境によって変えられる存在だが、同時に環境を変える存在でもある」⁽¹⁴⁾という理解をもつことになった。エンパワーメント・アプローチでは、さらにこの社会に対する視点が推し進められ、マイノリティのグループに属するひとびとが、いかにしてこの社会のなかで自律的に生活していくことができるかが問題とされるようになる。このエンパワーメント・アプローチにおいて、このような自律性の基礎として考えられているのは、効力感である⁽¹⁵⁾。

これまでのソーシャルワークのアプローチは、パールマンのワーカビリティ概念に照らして述べれば、能力の側面を中心にしてクライアントの「強さ」を考える傾向があった。コンピテンスという概念は、もっと包括的なものであるが、動機にかかわる資質としてあげられているのは「関心、興味、希望、向上心」⁽¹⁶⁾程度であり、やはり、能力と機会（環境）に重点が置かれているというべきである。

一方、エンパワーメント・アプローチにおいては、動機づけの側面にもかかわっていくことになる。効力感とは、もともと動機づけの心理学から生まれた概念だからである。逆の言い方をすれば、エンパワーメント以外のアプローチは、クライアントの能力を中心に考えるから、クライアントの「弱さ」や「強さ」を問題にしなけりばならなかつたともいえる⁽¹⁷⁾。

このことをまとめてみたのが図2である。

図2 アプローチにおける強調点

	能力	動機づけ	機会
心理社会的アプローチ	成熟した自我機能		間接療法 社会的弁護
生態学的モデル	適応能力		慈恵的環境
エンパワーメント・アプローチ		効力感	アクセス

そこで、この章では、まず、能力の側面ではなく、動機づけにかかわる効力感の条件としてどのようなものがあるのかを、波多野・稲垣の著作である『無気力の心理学 やりがいの条件』を参照しながら、みていくことにしたい。

(1) 効力感の条件

波多野・稲垣によれば、効力感とは、「自分が努力すれば、環境や自分自身に好ましい変化を生じさせる、という見通しや自信を持ち、しかも生き生きと環境に働きかけ、充実した生活を送っている状態」⁽¹⁸⁾のことである。その十分条件としては、「努力の主体、つまり行動をはじめ、それをコントロールしたのは、ほかならぬこの自分であるという感覚——自律性の感覚」⁽¹⁹⁾の存在を指摘している。

そして、「一般に事物に働きかけ、他者と交流しつつ人生を送っていく過程で、人々は自分自身の存在の意味についての問いを發し、そしてそれに答えていくと考えられる」⁽²⁰⁾として、真木のあげる3つの実存的欲求⁽²¹⁾、すなわち、①創造、②愛、③自己統合から、自己実現を考察している。以下、それぞれについての記述を引用してみる。

- ①「創造により自分を価値ある存在として確認しうる根拠は、結局のところ、自分なりのものをつくりあげているという満足感である」⁽²²⁾
- ②「愛による自己実現とは、最も広い意味では、他者との暖かい交流、人

の役に立ちうるという満足感にもとづくものであろうから、自分の熟達
が他の人々にとってなんらかの肯定的意味をもっている、という感じが
もてれば、この欲求の充足のために好ましい熟達の分野だということが
できる。」⁽²³⁾

- ③「自律性感覚が、『〇〇からの自由』以上の積極的な価値をもつのは、
自分が『自分自身のあるべき姿』に近づいていること、すなわち自己統
合に向かっていると感じられるからではあるまいか。そうだとすれば、
効力感の問題を人間の実存的欲求との関連でみていくことが、今度ま
ます必要になっていくかもしれない。」⁽²⁴⁾

これらのことを筆者なりにまとめてみると、①自分にとって魅力的な課
題のなかから「自己選択」できる機会をもつこと⁽²⁵⁾、②「外側からの報酬
や評価がこない」⁽²⁶⁾こと、換言すれば、「本人が自己向上を実感」⁽²⁷⁾でき、
それが「本人にとって、価値のある、真に『好ましい』もの」⁽²⁸⁾として感
じられていること、だといえよう。それは、スキーマの発達と言い換える
ことも可能である。

さらに、これらをよくみると、ロジャーズのあげた「パーソナリティ
変化の必要十分条件」⁽²⁹⁾と内容がほぼおなじであることにも気づく。すな
わち、①無条件の肯定的配慮、②共感的理解、③自己一致、という3つの
ポイントから、人と環境との交互作用にかかわっていくという視点を指摘
できると思われる。

また、これらのことは、いずれも、①効力感が、それ自体で完結しうる
ものではなく、実存的な問いを呼びさますこと、②スキーマとの関連で、
効力感が、きわめて個別的なことがらであること、したがって、③効力感
が、かならずしも社会的なパワーと直線的にはむすびついてはいないこと、
を示唆している。

ここでの論点は2つである。ひとつは、クライアントの動機づけである
効力感にかかわることによって、ソーシャルワークは、自己実現や生きが

いといった実存的な課題にかかわる糸口を得たということであり、もうひとつは、エンパワーメントをミクロのレベルで適用するときには、パワーの概念の修正が必要なことである。「自分が自分らしくあること」とは、まぎれもなく自分の弱さと向かい合うという側面や人生における限界を受け入れることをも含むものだからである。

したがって、次節では、エンパワーメントと弱さとの関係について考察することにした。

(2) エンパワーメントと弱さ

倉戸は、弱さの受容について、つぎのように述べる。

弱いときに弱いと思えるのは生身で生きている証拠なのではないか。感じられる証拠なのではないか。強がる必要もないし、強いと見せかける必要もない。弱いときには、それが現実なら仕方がない。弱い自分を偽らないでおこう。もう責めたりなんかしないでそんなじぶんと付き合いよう⁽³⁰⁾。

ここで述べられているのは、①弱さへのアクセスこそが強さの鍵であること、②弱さを受け入れること、いいかえれば、自分自身でありつづけることが強さなのだということである。だからこそ、この文章はつぎのようにつづけられる。「あたかも今回の経験が、さらに視野を広げ強くなるために私に付置されていたかのように思えるようになってきている。今日このごろ思う、強いと思っていることは弱さであり、弱いと思っていることは実は強さである、と」⁽³¹⁾。

これは、心理療法、とくにゲシュタルト療法において、ホメオスタシスまたは図地反転として述べられていること⁽³²⁾であるが、ここで筆者が述べたかったのは、自分自身であり続けることのたいせつさについてである。強さも弱さもふくめて、自分自身のフェルト・センスや感覚に気づいてい

くこと、めざめていくことが自己実現につながっていく。そして、そのような生き方から、ほかならぬ自分が生きていることの意味や生きがいも発見されていくものと思われる。つまり、効力感を感じるためには、弱さもふくめた自分自身の感覚にアクセスできることが不可欠だということである。この文脈では、弱さにアクセスできる能力が強さだということも可能であろう。そこには、いわゆる「強さ」だけをひたすら志向するアプローチにはない豊かな世界がひろがっているはずである。

5. 弱さと自己実現

神谷は、『生きがいについて』のなかで、つぎのように述べている。

活動性にとんだひとは、平生のつとめのほかに、いろいろと仕事をつくり出し、他人との関係もたくさん結び、毎日いそがしくとびまわることにはすがすがしい生存の充実を感じる。それはスポーツにも似た健康なエネルギーの駆使である。そういうひとは、たえずとびまわっていることが、平常の「生存感」になっているから、ちょっとでも活動をやめると自己の生を空虚に感じてしまう。それで、ますます一瞬の隙もないように、活動へと自らを駆りたてることになる。

これに反して、こまやかな感受性をもったひとは、しずかなくらしのささやかな事柄のなかに生存充実感を求め、感度の高い受信機のように、ふつうのひとには見のがされてしまうようなところからこれをつかまえてくる⁽³³⁾。

この2つをユングにならって、外向型と内向型⁽³⁴⁾とよぶとすれば、エンパワーメント・アプローチは外向型のひとになじみやすいと思われる。しかし、ソーシャルワークは、後者のような内向型のひとたちの自己実現にもコミットできるものであるべきだろう。

では、そのようなエンパワーメントの視点とは、どのようなものになるのだろうか。ソーシャルワークの固有の視点が、人と環境とのインターフェイスにあるとすれば、このことを考えるヒントは、つぎの2つになると思われる。ひとつは、現実の世界と精神の世界のインターフェイスであり、もうひとつは、他者の存在によって自己のアイデンティティが明確にされるといふ視点である。

(1) 現実世界と精神の世界のインターフェイス

このことについて、神谷はつぎのように述べている。

このように、現実の世界と精神の世界と、いわば両棲動物のように二つの世界にふたまたかけて生きているそのありかたは、あらゆる人間に多少ともみられる現象で、人間存在の二様性などとよばれ、すべて精神生活をもつ人間の、基本的な生活様式であると考えられている⁽³⁵⁾。

つまり、「結局、現世に生きるかぎり、生命と精神の矛盾のなかで生きぬくことこそ人間に与えられた運命なの」⁽³⁶⁾だから、そのインターフェイスや相互作用にかかわることが、そのひとの life（生命や人生という意味も含めた生活）にかかわっていくことになるのではないだろうか。

これは、水島のいう有機体的生命性の相から自覚的存在性の相にわたることが⁽³⁷⁾であり、冒頭で引用した久保のことばで表現すれば「もう一つの世界」を生きるということになるだろう。

このような存在様式は、生命を維持しつつも必然的に老化や死へ向かっていくという life（生命、生活、人生）に内在した矛盾を無視して、いたずらに健康や外界への適応の能力だけを志向する、Power に依拠したありかたとは、明確に区別されるべきである。それは、人生の限界に直面し、life の流れや矛盾を受容する（身をゆだねる）過程を経て、はじめてひらかれてくる世界だといえよう。このような human（人間的）な視点にも、

ソーシャルワークは関心を寄せるべきだと思われる。

ソーシャルワーク実践の文脈でいえば、セルフヘルプ・グループなどの世界と現実生活の世界のふたつ（以上）の世界を、実際の生活のなかで棲み分けていくという生活様式も、このなかに含まれるだろう。

(2) 他者から意味づけられることによって成り立つ自己

これまで述べてきたように、弱さによる自己実現の視点は、生態学的視座ではストレスとして⁽³⁸⁾、エンパワーメント・アプローチでは情緒へのアクセスとして⁽³⁹⁾述べられているに過ぎず、それ以上には深められていないのではないと思われる。

神谷は、生きがいへの欲求は「むしろ生物学的欲求の領域のおわるところから始まる」⁽⁴⁰⁾と述べる。たとえば、ストレスということばでは表現しきれない限界状況に置かれているひとたちには、生活ということばさえ、ふさわしくないと感じられよう。人生そのものに内在している「脆さ」に直面するこのような実存的な瞬間もまた、ライフの要素のひとつだからである。これは、生態学的モデルの限界を意味しているといえるかもしれない。

また、見方をかえれば、強さにこだわることの裏には、弱さが存在している可能性もある。たとえば、鷺田はつぎのように述べる。

このように考えると、先にみた「過剰な合理主義」や「接触回避」などの現象も、自分というストーリーを紡ぎだす一つのメソッドだったということになる。他人との関係のなかでじぶんの意味づけが十分に配給されないので、あるいはじぶんと他人がたがいにその意味づけを無効にしあうようなぎくしゃくした関係しか結べていないので、じぶんひとりで明確な物語（レインは「空想のシナリオ」と呼ぶ）を紡ぎだすしかなかったのだ。不自然なまでに輪郭のはっきりした（ということは融通のきかない）物語を、である⁽⁴¹⁾。

ここで決定的に欠如しているのは、じぶんを意味づけてくれる他者⁽⁴²⁾の存在であり、無条件の肯定的配慮や共感であるといえよう。鷺田がのべるように、「人生とは、ある意味では、こうした『じぶんに語って聞かせるストーリー
説話』が、自他のあいだでたがいに無効化しあう不協和のなかにあって何度も何度も破綻する過程であり、またそれを別のしかたで物語りなおすべく試みる過程」⁽⁴³⁾でもあるといえるからである。人生には、必然的に脆さや弱さが内在している。

だとすれば、わたしたちは、弱さを否定しては生きていけないことになる。したがって、神谷は、「生きがいについて」の最後でこう述べるのだ。「これら病めるひとたちの問題は人間みんなの問題なのである。であるから私たちは、このひとたちひとりひとりとともに、たえずあらたに光を求めつづけるのみである」⁽⁴⁴⁾と。弱さによる自己実現とは、自分にとっての意味ある他者（あるいは、それは、自己を越えた大いなる自然や存在そのものである場合もあると思われる）によって、たえず生存の意味を与えられつつ生きていく視点でもあると思われる。弱者の視点を、このような関係性を含むものとして理解していくことは、後述するように、ナルシズムの問題を考えるうえでもたいせつなことである。

6. ソーシャルワーク実践における「弱さ」の意義

ここまでみてきたように、ソーシャルワークにおけるエンパワーメントとは、効力感のことであり、従来のように、その視野が社会との関係にしか向かなければ、弱さや限界による自己実現は、その射程には入ってこない。しかし、心理臨床だけではなく、ソーシャルワークもまた、クライエントの自己実現にかかわる援助のはずである。つまり、弱さにかかわることがあやまりなのではなく、いままで弱さが効力感とのかかわりではなく、能力とのかかわりで論じられていたことが不適切だったのだといえるだろ

う。

ただ、「当事者の視点」では、実存的な視点のニュアンスが不足していると思われるので、本稿では、それを竹内てるよにならって「弱者の視点」とよぶことにしたい。弱者の視点で追及されるものは、自分自身であり続けることが生きがいや自己実現の鍵であり、そこでは、強さや弱さという概念でlifeを単純に意味づけていくことができないような世界が存在しているということである。

したがって、自分自身であり続けることから目をそむけ、自らの弱さばかりを強調する自己愛的なパーソナリティのありかたとは、明確に区別される必要がある。いわゆる弱さとは、それが受け入れられ、生きられてこそ、はじめて強さになるものだからである。

では、この弱者の視点の特徴として、どのようなことがいえるだろうか。人間はその人生のなかで、老・病・死、その他、ストレスということばでは表現しきれないような極限状況に置かれることがある、ということがある。このような、いわば「はだかの個人」が、いかにして「精神化」⁽⁴⁵⁾とよばれる過程と現実の生活に折り合いをつけていくのかに関心を向ける必要を指摘しておきたい。つまり、弱者がいかにして市民として生活していくかという弱者と市民のベクトルが交わる場所（個人と社会とのインターフェイス）に生活者の視点をみいだすことができるという指摘である。また、その視点は、同時に、他者によってたえず生存の意味を与えられつつ生きていくことをも含んでいる。弱者の視点とは、限界や弱さをとおして、このような生活者やその関係性に関心を向ける視点でもある。

ソーシャルワーク、とくにケースワークにおいては、このような複眼的な生活者のとらえ方が要請されるだろう。それは、効力感という概念自体が、そのオリエンテーションとして、社会的なものときわめて個人的なことの2つを複眼的にもっていることにも起因している。

あるいは、それは、過度に健康を求めるといふ、新しい医学モデルともよべるような現象へのアプローチをも可能にしてくれるということもあ

る。過度に健康を求めることは、コントロールの能力という意味で強さの視点であり、たとえば、がんに罹患したひとが、死の予定を少しでも延ばそうとして、手術や抗がん剤をはじめとした苦しい治療に耐え抜き、死に対抗することがそれである。しかし、いますぐ死ぬわけではないので「これからも生きていいんだ」⁽⁴⁶⁾とありのままの自分や人生を受け入れていく視点もある。前者の視点を採用した方が豊かな人生を送ることができると言い切ることは、おそらくできない。あるいは、生きがいや自己実現といったものには、従来のパワー概念は通用しないことの方が多いというべきかもしれない。強さを志向するアプローチは、単一の^{ストーリー}説話しか作りえないから（複眼的ではないから）、逆に脆いともいえよう。

7. おわりに

本稿で述べた「弱さ」についての論考は、じつはセルフヘルプ・グループの研究者が、以前から行なっていたものであるといえる。本稿は、久保が『自立のための援助論』のなかで、当事者の視点として述べていることとおなじオリエンテーションに立っている。また、セルフヘルプ・グループや当事者の生き方から学ぶというテーマで書かれたものの中には、すぐれたものも少なくない。しかし、このような視点がソーシャルワークの体系のなかで述べられることは、あまり多くなかったのではないだろうか。

ソーシャルワークにおいて、生態学的視座やエンパワーメント・アプローチが重要であることはいうまでもない。筆者は、そこに、「弱さ」ということをとおして、実存的視座をつけくわえていく、あるいは深化させていく必要を感じる。というのは、西洋文化においては、キリスト教に根ざした「弱さ」への視点が存在していて、それが、エンパワーメント・アプローチと相補的に機能していると考えられるからである。たとえば、ニューヨーク大学医療センターの玄関近くの壁には、つぎのような詩のレリーフが掲げられている。

ソーシャルワークにおける「弱者」の視点

成功を求めて 強さを与えて欲しいと、神に求めたのに

私は弱さを与えられた 謙虚に従うことを学ぶために……

より大きな仕事ができるようにと 健康を求めたのに

私は病弱を与えられた 少しでもよいことができるようにと……

幸せになれるようにと 富を求めたのに

私は貧しさを与えられた 賢明でいられるようにと……

人々の賞賛を受けようとして 権力を求めたのに

私は弱さを与えられた 神を求めるようにと……

人生を楽しむことができるようにと 手に入るものは何でも欲しかったのに

私は命を与えられた あらゆることを歓べるようにと……

欲しいと思ったものは何にも与えられなかったのに

私の希望はすべてかなえられた

こんな私にもかかわらず 祈りは言葉を超えてすべて聞かれた

私は誰よりも一番豊かな恵みを受けた⁽⁴⁷⁾

筆者は、この詩を読んで、神谷の『生きがいについて』のなかのつぎのことばを思い浮かべる。

このようなことを彼に教えたのは苦しみと悲しみの体験であった。このようなことをわかってくれるひともまた深い苦悩を一度は通ったことのあるひとにほとんどかぎられていた。結局、人間の心のほんとうの幸

福を知っているひとは、世にときめいているひとや、いわゆる幸福な人種ではない。かえて不幸なひと、悩んでいるひと、貧しいひとのほうが、人間らしい、そぼくな心を持ち、人間の持ちうる、朽ちぬよるこびを知っていることが多いのだ——⁽⁴⁸⁾。

生態学的視座は、もともと複眼的であるが、本稿で述べたような「弱者の視点」は、効力感を通して生きがいや自己実現にアプローチしていくときに必然的に要請されてくる、エンパワーメント・アプローチにおける human（人間的）な視点だと思われる。

(注)

- (1) 久保絃章『自立のための援助論』、川島書店、1988年、118ページ。
- (2) 前掲書、119ページ。
- (3) このパワーについては、久保美紀「ソーシャルワークにおける Empowerment 概念の検討——Power との関連を中心に」(『ソーシャルワーク研究』第21巻2号、相川書房、1995年所収)の95ページに、ライフモデルアプローチでは「power とは適応能力 (capacity for adaptation) とされ、それは環境との 'goodness of fit'、肯定的な自己評価、満足感と関係している。さらに、個人が自立して何かをなしたり、他の人に影響を及ぼしあるいはコントロールすることを可能にする資源の所有」として述べられている。
- (4) 水島恵一『人間の可能性と限界』、大日本図書、1994年、18ページ。
- (5) 小松源助『ソーシャルワーク理論の歴史と展開』、川島書店、1993年、62ページ。
- (6) 中園康夫「戦後におけるケースワーク研究の動向と課題」(『社会福祉学』第6号、1966年所収)76ページ。
- (7) 松木邦裕は、「大場登『ユングの「ペルソナ」再考』への書評」(『心理臨床学研究』第19巻 第2号、日本心理臨床学会、2001年所収)の196ページにおいて、「いまここでの転移を扱わないでどのようにして治療者はクライアントの切迫した深い思いに触れられるのであろうか」と述べている。
- (8) たとえば、ジャーメイン「ケースワークと科学」(ロバーツ、ニー、久保絃章訳『ソーシャル・ケースワークの理論 I』、川島書店、1985年所収)の13ページ

ソーシャルワークにおける「弱者」の視点

ジ、および、久保絃章「ライフ・モデル」(武田建・荒川義子編著『臨床ケースワーク』、川島書店、1986年所収)の134~136ページなどを参照。

- (9) 前者はジャーメインの、後者は太田(太田義弘「ジェネラル・ソーシャルワークの基本概念」、太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』、光生館、1999年、22ページ)の見解である。
- (10) ホリス「ケースワーク実践における心理社会的アプローチ」(ロバーツ、ニー、久保絃章訳『ソーシャル・ケースワークの理論Ⅰ』、川島書店、1985年所収)の35ページには、心理社会的アプローチが影響を受けた人物として、自我心理学の基礎をきずいたアンナ・フロイトや自我の適応能力を強調したハルトマンの名前があげられている。
- (11) 前掲書、32ページ。
- (12) ジャーメイン「人間と環境との交互作用」(ジャーメイン、小島蓉子編訳・著『エコロジカル・ソーシャルワーク』、学苑社、1992年所収)の101~128ページを参照。
- (13) 久保は、「社会福祉援助活動を支える諸理論」(山崎美貴子・北川清一編著『社会福祉援助活動 転換期における専門職のあり方を問う』、岩崎学術出版社、1998年所収)の81ページで、「ホリスは、個人と状況(社会)をつなぐ接点を『自我』に求めたので、自我心理学がその理論的枠組みを支えていることになる。この点でホリスは、人と状況との全体関連性という生態学的モデルの先駆けとなる」と述べている。
- (14) 久保絃章「ライフ・モデル」(武田建・荒川義子編著『臨床ケースワーク』、川島書店、1986年所収)139ページ。
- (15) この議論については、安井理夫「ソーシャルワークにおけるセルフヘルプ・グループ——エンパワーメントとQOLの視点からの検討——」、『同朋大学論叢』第84号、2001年所収)の83~87ページ、および、久木田純「エンパワーメントとは何か」(久木田純、渡辺文夫編『現代のエスプリ エンパワーメント』、至文堂、1998年所収)の10~34ページなどを参照。後者の17ページには、エンパワーメントが内発的動機づけとの関連で述べられている。
- (16) 秋山薊二「コンピテンス促進の戦略と技術」(太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』、光生館、1999年所収)132ページ。
- (17) 波多野誼余夫・稲垣佳世子『無気力の心理学 やりがいの条件』、中公新書、1981年、35~44ページには、失敗を自分の能力不足のせいにする傾向の強い子どもほど、無力感に陥りやすいことが述べられている。
- (18) 前掲書、51ページ。
- (19) 前掲書、63ページ。

- 20) 前掲書、97 ページ。
- 21) 真木悠介『人間解放の理論のために』、筑摩書房、1971 年。
- 22) 波多野諄余夫・稲垣佳世子『無気力の心理学 やりがいの条件』、中公新書、1981 年、97～98 ページ。
- 23) 前掲書、98 ページ。
- 24) 前掲書、99 ページ。
- 25) 前掲書、68～71 ページ。
- 26) 前掲書、71 ページ。
- 27) 前掲書、89 ページ。
- 28) 前掲書、90 ページ。
- 29) ロージャズ「クライアント中心療法の立場から発展した治療、パーソナリティおよび人間関係についての理論」（ロージャズ、畠瀬稔、阿部八郎編訳『ロージャズ選書 7 来談者中心療法——その現況と発展——』、岩崎書店、1964 年所収）208～209 ページ。
- 30) 倉戸ヨシヤ『図地反転』、関西カウンセリングセンター、1996 年、26～27 ページ。
- 31) 前掲書、27 ページ。
- 32) たとえば、水島恵一『人間の可能性と限界』、大日本図書、1994 年、35～37 ページを参照。
- 33) 神谷美恵子『生きがいについて』、みすず書房、1980 年、55 ページ。
- 34) 河合隼雄『ユング心理学入門』、培風館、1967 年、41～47 ページ。
- 35) 神谷美恵子『生きがいについて』、みすず書房、1980 年、198 ページ。
- 36) 前掲書、200 ページ。
- 37) 水島恵一「人間性の諸相と実存」（『人間性心理学研究』第 11 巻 1 号、日本人間性心理学会、1993 年所収）の 4～6 ページを参照。
- 38) たとえば、久保紘章「ライフ・モデル」（武田建・荒川義子編著『臨床ケースワーク』、川島書店、1986 年所収）140～143 ページを参照。
- 39) 中村佐織「エンパワーメント戦略と技術」（太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』、光生館、1999 年所収）、125 ページのコックスの無力さの 7 分類についての記述を参照。
- 40) 神谷美恵子『生きがいについて』、みすず書房、1980 年、52 ページ。
- 41) 鷺田清一『じぶん・この不思議な存在』、講談社現代新書、1996 年、72 ページ。
- 42) 鷺田は、前掲書、122 ページで、「その他者にとって意味のある存在として自分を経験することができる」ことのたいせつさについて述べている。
- 43) 前掲書、72 ページ。

ソーシャルワークにおける「弱者」の視点

- (44) 神谷美恵子『生きがいについて』、みすず書房、1980年、269ページ。
- (45) 神谷は、前掲書の198ページで、精神化を「生存の重みなり基盤なりの全体が精神の領域に大きくかたむくことを意味したい」と述べている。
- (46) 藤本真知子「生きていいんだ」、朝日新聞、2002.1.14.
- (47) 柏木昭「障害者福祉の理念」（柏木昭、高橋一編『精神保健福祉士養成セミナー 第4巻 精神保健福祉論』、へるす出版、1998年所収）33～34ページ。
- (48) 神谷美恵子『生きがいについて』、みすず書房、1980年、255～256ページ。